
涙

クー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
涙

【Nコード】
N5587A

【作者名】
クー

【あらすじ】
最終兵器彼女のストーリー

涙

ちせ「シュウちゃん、私シュウちゃんにあえてとてもうれしかった」
シュウジ「・・・」

ちせ「サヨナラ・・・」

シュウジ「うわああああ」

シュウジの叫び声は天に届くぐらい大きな声で泣いた。

3時間前

いつもどりの地獄坂をちせと一緒に登っていた時だった・・・
???「あれがチセがこの国が作った最終兵器・・・」

ちせは気づいていなかった、遠い所から誰かが見つめているのを・・・。

そしてちせとシュウジは学校についた

アツシ「おう、相変わらず2人とも仲がいいね」

シュウジ「アホ、ちやかすなつて」

アツシ「照れるなつて」

ちせは真っ赤な顔でもじもじしていた。

シュウジ「だからさあ、アツシ・・・」と言いかけた時だった、ちせが何かに気が付いたのは、シュウジがその様子を見て驚いて、ちせの手をつかみ教室を出て屋上にでた。

『教室では』

アツシ「どうしたんだシュウジの奴？」

アケミ「まさか、ちせと屋上でHする気？」

アツシ「何iiiiiii？」

アケミ「すぐに屋上にいかないとー!!」

『屋上では』

シュウジ「どうしたんだまさかここに来るのか？飛行機か？爆弾？」

ちせ「わからないしよや、でも何か違う感じのものがくる。」

シュウジ「なんだよそれ・・・」

そんな時だった天から一筋のビームのようなものがきた。

ちせ「来た。」

一瞬でビームのような線は学校を真つ二つにした

シュウジ「なんだよこれなんなんだよ・・・」

学校にいた生徒は運よく誰も死んではいなかった。

シュウジ「良かった」

???「はずしたか・・・」

シュウジ「誰なんだよ、お前は」

???「・・・」

ちせ「シュウちゃん危ない」と、ちせにおされて助かった

シュウジ「痛たたた、ちせ大丈夫？」

そしてシュウジはちせのほうを見ると、

シュウジ「ハッ・・・」

自然にちせの目から涙がでてきた、ちせは真つ赤な血がだらだらと
でていた。

ちせ「私なんかしたんかなあ？これはなんかの罰なんかなあ？」血
まみれになっているちせがゆっくりと話す

シュウジ「ちせ・・・ちせ「ご・・・め・・・ん・・・ね・・・」

シュウジ「大丈夫だきつと助かる。だからちせ死ぬなー!!」

ちせは涙を流しながら目を閉じていた
シュウジ「ちせええええええ」

しばらく僕らは抱きあっていた。

司令部

司令官「なんだ今のは？」

副司令官「わからん、だがアメリカからの攻撃のようだ」

司令官「なんだと」

副司令官「ついに完成した見たいだな。」

司令官「ああ、アメリカの最終兵器か・・・」

下校

ちせは救急車にはこばれて学校を後にした。

アツシ「シュウジ、ちせちゃんどうしたんだよ？」

シュウジ「俺にもわからねえよ、空が光ったと思ったら一瞬であんな事になっていたんだ。」

アツシ「・・・」

二人は黙りこんでしばらく時間がたった、そして二人は別れた

緊急治療室

薄暗いなかでカプセルのようなものだけが光っていた、そこにはちせがいた

ちせ（シュウちゃん・・・シュウちゃん・・・）

カプセルの外には白衣をきた人達に囲まれていた。どうやら医者のようなだ、その中の一人が少しづつ話はじめた

医者A「もうこの子は無理だこれ以上たたかうとこの子の心が壊れ

てしまう」

司令官「それでも、この子に託すしかないんだ」

司令官は何も迷わずしゃべりはじめた

司令官「感情を消せ」

医者A「そんな事をしたらこの子は・・・」

司令官「別に構わん」

医者A「・・・」

司令官は銃をちらつかせながら行つた

司令官「早くしろ！」

医者A「くっ・・・」

医者がコンピューターを操作しはじめると

司令官「そうだ、記憶も消せ、それぐらいなんとかなるだろ？」

医者A「わかりました」

ちせ（シュウちゃん・・・シュウちゃん・・・あれ・・・シュウちゃんって誰だっけ？）

涙の後の悲しみ（前書き）

この小説は涙の続きで連載の小説です。

涙の後の悲しみ

アケミ「ちせ来ないね」

アケミ「シュウジあんたなんか知らないの」

シュウジ「・・・」

あれから何日たつだろうか、ちせは帰って来なかった学校もあの事件以降にも出来なくなったので休みになっていて

アケミとシュウジは、学校の近くにある公園で話をしていた。戦争が終わる気配など全くなく逆にかなり悪化していた。

シュウジ「早く戦争おわらないかな」

アケミ「あんた何いつてるの少しはちせの事をしんぱい・・・」

アケミは話の途中で止まった、なぜならシュウジが手を思いつき握り拳を握っていたからである。

シュウジ（ちせどうしたんだよ）

アケミ「・・・」

その時だった無数の飛行機が飛んで来たそれはあきらかに日本の飛行機ではなかった

そしてその飛行機を一瞬にして光がおおった目が眩しくなったシュウジ達は目を閉じた

シュウジ「ちせ？」

アケミ「えっ？」

急いで光があつた山の近くにいったもちろんアケミをおいてきた、アケミはちせは最終兵器だという事を知らない、だから知らないままのほうがいい何も知らないほうが

シュウジ「確かこの辺だったはずだけど」

その場所は初めてちせとキスをした場所だった。シュウジは辺りを探した。そして何か光る物を見つけその方向に向かった

シュウジ「ちせ？」

ちせ「誰だお前」

ちせは冷たい声でいった

シュウジ「何いってるんだ俺だよシュウ……」

ちせ「貴様などしらん」

シュウジ「ちせ？」

するとちせはこっちに武器を向けた

ちせ「殺すぞ!!」

シュウジ「……」

シュウジはそのちせを見て思いっきり抱き付いた。

ちせ「本当に殺すぞ」

シュウジ「忘れっちまったのかよちせ？」

シュウジは泣きながら聞いた

ちせ「貴様など貴様など……」

何かをいいかけた時だった。

ちせ「ちっ!!まだ生きてたか」

ふと見るとまた何機かの飛行機が飛んで来た

シュウジ「やめろ」

シュウジはちせを強く抱き締めた

シュウジ「もうこれ以上ひとを殺さないでくれ頼む」

ちせ「くっ」

ちせはシュウジを武器で撃った、その瞬間シュウジは血まみれになった。

シュウジ「ちせ……」

ちせ「死んだかやつと静かに……」

その言葉の続きがいえない気が着くと、ちせはなっていた。

ちせ「なんでだなんて私は泣いている」

飛行機のミサイルが無造作にちせを目掛けて当てに来た

ちせ「わたしは……わたしは……」

その時ちせの頭の中にあつた記憶の一部分が蘇った

ちせ「シュ……ウ……ちゃ……ん」

ミサイルが当たり無造作にちせとシュウジをおおい隠した……

ちせ「シュウちゃん・・・」

続く！！

最後の涙

僕は何をしているのだろうか？わからない？？？？

「うつっ」

誰だろうか、泣いているのかな？

ちせ「シュウちゃん」

・・・

また僕は暗闇の中に入っていく、いったい何日たつたろうか僕は暗闇の中にいた。

ちせ「シュウちゃん」

シュウジ「！！！」

シュウジ「ち・・・せ・・・？」

ちせ「シュウちゃん！！！」

僕はまだ生きていた、周りを見るとここは本当に僕達の住んでいたところなのだろうか・・・と思う

そして僕はまた眠った

ちせ「早く、お医者さんに見せないと」

そっいいながら基地のほうに向かおうとした時だった

???「まだ生きていたのか」

それはちせに良く似た羽をつけていた。その羽は黒くまるで悪魔を見ているようだった。

ちせ「あなたは誰ですか？」

ゆっくりと口を開いてその男の兵器はしゃべった。

カイ「俺はアメリカで作られたお前のコピーだ、つまり最新兵器だ貴様とはまた違う力があるのだ」

ちせはその兵器を見て驚いた、なぜならアメリカも同じような兵器を作るとは思いもしなかったからである。

ちせ「ごめんね。そこを通して下さい。」

ちせは泣きながらいった

ちせ「シュウちゃんを早く病院に連れていかないといけないから声がふるえながらしゃべった

カイ「貴様がしねばな」

ちせ「もうこれ以上、誰もきずつけたくない」

一瞬でちせの光は世界中に広がった

カイ「なに・・・こんなはずは・・・な・・・い。俺はアメリカで作られた最新兵器だぞ」

カイ「くそつたれ！」

地球は一瞬にして真っ白になった、そこにいるのは多分、2人だけだろう

ちせ「ごめんね・・・シュウちゃん」

ちせ「私のせいで」

シュウジ「あほ、お前のせいじゃないって」

ちせはその声に驚いた

ちせ「シュウちゃん!!」

ちせ「なんで？」

ちせは泣きながら聞いた

シュウジ「そりゃあちせ、僕が真っ暗の中にしずんでいったらいきなり、光がみえたんだ」

ちせ「ひかり？」

ちせがうつすらと聞くとシュウジは答えた

シュウジ「そのなまら暖かい光が僕にゆったんだ」

???「アホかお前ちせ中隊を泣かせたまま行く気か？早く戻って

やれ、こつちにはもう来るなよ!!」

シュウジ「という事があつたんだよ」

なにがなんだか良くわからないが、シュウジはここにいるただそれだけで良かった、

ちせ「シュウちゃん」また大粒の涙を流した

ちせ「ごめんね・・ごめんなさい」

シュウジは笑いながら答えた

シュウジ「もういいって」

ちせ「シュウちゃん」

シュウジ「ちせ」

僕達はこの誰もいなくなった世界で生きていかなければならない。
でもちせがいるそして僕もいるだから何だって出来る気がした

シュウジとちせは2人でキスをした。

この世界で初めてのキスをした。

この世界で僕達は生きて行く

この先なにがあるうとも

僕達は恋をしてる

僕達は生きている

続くのか？

おまけ

???「なんだまたお前か？」

ヒゲが少し生えて軍隊の服をきた人がいう

ふゆみ「また、さんずの川の近くにおるん？テツ」

すわっていたテツはゆっくりと立上がり、笑いながら答えた

テツ「しょうがないだろ、どっかのアホがさんずの川の近くにいたんだから」

ふゆみはテツに近づいて少し笑いながら話を聞いた

テツ「なんだよ？」

ふゆみ「ううん、別になんでもない」

そうするとふゆみはまた少し笑った

テツ「たくっなんなんだかなあ」

???「お父さん、お母さん」

1人の女の子が笑いながらこっちに走ってきた。

テツ「また走るとケガするぞツユミ。」

ツユミはちよつと怒ったような顔で話した

ツユミ「お父さん、早く遊びに行こうよ」

テツ「ああ、そうだな」

ふゆみ「じゃあ行きましょうか」

そして3人はさんずの川を離れて行く前にテツはまた振り返った

テツ（後はまかしたぞシュウジ、ちせ中隊長）

ツユミ「お父さん早く」

テツ「わかったわかった」

記憶の中の涙（前書き）

地球が滅亡して、ちせとシュウジだけいる世界でその後どうなったか、前回の涙の続きで最終兵器彼女、セカンドストーリーです

記憶の中の涙

真っ白になった地球には二人の姿だけが見えた、あれは明らかにシュウジとちせだった。二人は一生このままなのだろうかと考えた

そんな時シュウジとちせの近くの砂場が動いた

シュウジ「だれがいるのか？」

おそろおそろと動いた所を見ていた、その瞬間だった

カイ「はあ、はあ」

それは羽がもがれてボロボロになったアメリカの最新兵器だった。

シュウジ「……」

シュウジ達は慌てる様子など全くなかった

カイ「貴様ら……」

今にも倒れそうな足並みでシュウジとちせに近ずいた

カイ「はあはあー」

一息おいて話はじめた

カイ「貴様ら……殺すぞ！」

ボロボロになりながらも殺意だけは消さなかった。

最初にしゃべり始めたのはシュウジだった。

シュウジ「もう地球は終わったんだ、これからはちせと一緒に生きて行く邪魔をするな」

カイはその言葉にどこかで聞き覚えがあった

『これからは・・・と生きて行く・・・邪魔をするな・・・』

カイの動きが止まった

ちせ「あなたは、悲しい人しよや」

カイ「何がだ？」

ちせ「あなたは兵器になる前に誰かを愛したことはないんかな？」

カイ「俺が人を愛するだと、兵器になる前の記憶はアメリカの研究員が全部けしたんだ、そんなものわかるはずがない！！」

ちせ「やっぱり悲しい人しよや」

またカイの頭の中で少しの記憶が蘇った

『やっぱり・・・・・・は悲しい人・・・』

『じめんね．．．』

『．．．何かあったの？』

『．．．好きだよ．．．』

『この．．．世界で．．．1番．．．大切な．．．』

カイはヒザをついてゲロを吐いていた

シュウジ「どうかしたんか？」

ちせ「カイさん大丈夫．．？」

ちせとシュウジはカイに近づいた

カイ「離れる！クソが！！」

カイは酷く拒絶した

カイ「やめろ、やめろくるな」

シュウジ「大丈夫か？」

ちせ「もう人が死ぬところなんか見たくない」

カイはゆっくりと起き上がると、ちせとシュウジは驚いた

シュウジ「涙？」

気が付けばカイは涙を大量に流していた

カイ「くっ・・・」

ちせ「まさか？」

シュウジが軽く頷いて話をはじめた

シュウジ「お前まさか記憶が・・・」

カイ「黙れ黙れ！！」

シュウジ「いったい最新兵器になる前に何があったんだよ教えてくれ」

カイ「はあはあはあ」

ちせ「カイさん」

カイ「なんで今頃になって思いだすんだよ」

シュウジ「話してくれたら楽になると思うんだ、だから話してくれ」

ないか？」

カイは仕方なさそうに口を開き始めた

カイ「まあ地球はもう滅亡して誰もいねえ〜んだ別に構わないか」

少し溜め息をついて話しを始めた

カイ「あれは兵器になる前の話だ」

『5年前』

アメリカにいたカイはまだ14歳だった。

急にお父さんの出張で日本に来た時の事だった。

カイ「……………」

カイはさすがに初めての日本という事もあり緊張ぎみだった。

親父「ほー、お前でも緊張するんだな」

カイはギロと睨みいいかえした

カイ「クソ親父だつてここに来る前に何回、トイレに行ってるんだよ、飛行機でもトイレトイレとそればかりじゃねえか？」

親父「うるさい」

空港に着いたとたんに二人は睨みあい喧嘩していた。

親父は一応、科学者だった

日本には、なんとか兵器の実験があるという事で来た、なぜか一緒に着いて行く事になった

カイ「クソ親父、大丈夫なのか？ちゃんと目的地につくのか？」

人込みの中に二人は話をしながら歩いていた

親父「大丈夫だバツカモンちゃんと着く」

なんだかんだと言って目的地に着いた、その頃にはもう太陽が沈み始めていた。

空港に着いたの朝の8時だったのに今、時計を見ると夕方の6時過ぎだった。

カイ「結局まよいやがって」

親父「まあいいじゃねえか？なんとか着いたんだし」

カイ「そういう問題か？クソが」

カイと親父は、研究所に行った。

親父「すみません。道に迷ってしまい・・・」

研究員「いいんですよ、私はサイトウといいます。早速ですがこれを見てくれませんか？」

それはカプセルの中に人が、はいつていた
その子は俺と同じぐらいの女の子だった

親父「この子はまさか？」

サイトウ「はい、クローンです」

カイは親父の顔が厳しい顔になっていたのを見た

サイトウ「この子はクローンの中でも感情がはつきりしていました
ね今回の実験に使う事になりました」

親父「……………」

研究員がまた話を進めていった

サイトウ「そしてあと1歩の所でいきつまっているのです。」

親父「それで我々に力を貸して欲しいと？」

サイトウ「ご名答、そしてこの子が世界で初めての最強の兵器になる
のです。素張らしいじゃないですか」

サイトウはどこから声を出しているかわからないくらい大きな声
で笑った。

これが何もかも始まりだと俺らは知るよしもなかった。

続く!!

逃亡

オレは親父と一緒にホテルに泊まっていた。座りながら話を始めたのはカイだった。

カイ「親父、今日いた子は人間なのかな？」

親父は突然、立ち上がり、とても怖い顔していた

親父「カイよく聴け、命あるものはみんな生きているんだ！生きようとしている。それだけでいいだろ？」

カイ「そうだな」

カイは初めて親父の言う事を聞いた。

親父「クローンは作られた命だ、だが生きようとする意志はあるはずだ、だからあの子を私達の国に連れて行ってあの子を守ろう」

カイ「親父そんな事をしたら・・・」

親父「いいんだ、あの子には兵器としてではなく、普通の人間として生きて欲しいんだ、そもそも人体兵器などこの世にあってはなら

ないものなのだから」

カイ「わかったよ親父オレは、あの子を守る必ず」

カイと親父は二人でどうやってあの子をアメリカまで連れて行くかを考えていた。

親父「オレが見張りの軍隊をひきつける」

そついうと親父は銃を取り出した。

カイ「親父これは？」

親父「いざという時に使え、使い方はわかるだろ？」

カイはその銃を手を持った、カイはアメリカでは銃を良く使うので銃の扱いにはなれていた。

カイ「わかった。」

親父「あの子の未来はお前にかかっているんだぞ、アメリカの未来もな!!」

カイ「アメリカの未来？」

カイは疑問に思った。

親父「お前には関係ない事だ」

親父は焦りつつ話題をかえた

親父「オレの仲間がこのホテルの屋上でヘリコプターで待機してる。それに乗ってアメリカまでいけ」

カイ「わかった、それでいつ行くんだよ？」

堂々と親父は答えた

親父「明日だ・・・」

『次の日』

作戦は予定通り行われた・・・親父はまず見張りの人に話をした

親父「すみませんがトイレはどこですか？」

見張り「この道を真っ直ぐ行つて右にいけばわかります」

親父「すみませんが方向おんちなもので、一緒に着いてきてくれませんか？」

軍隊「いいですよ」

そうすると見張りの軍隊は誰もいなくなつた

カイ「さあ、始めるか・・・」

カプセルの前に立ち、カプセルを開けるスイッチを押した、そうするとカプセルは開きはじめた。

カイ「・・・・・・・・」

その子は目を覚ましたそうすると辺りを見回した

????「ここはどこなんかな？あなた誰しょや？」

カイ（どっかの方言か）

カイ「とにかく早く一緒に逃げるぞ」

「???? えっ?」

そうすると研究所の外から声が聞こえはじめた。

カイ「まずいもう戻ってきやがった。」

カイはその女の子と一緒に手を握って走りはじめた。

カイ「逃げるぞ!!」

「????」

なんとか逃げ切ってもうホテルの前まで着いていた。

カイ「ここまでくれば・・・」

カチッ

背後から銃を持った見張りの人達がいた・・・

カイ「チッ」

見張りの軍隊「やっと見つけましたよ。あなたを銃殺しろと政府が

らの命令なんでね・・・」

カイはいつの間にか囲まれていた。

カイ「クソここまで来て・・・」

その時だった、道の間からいきなり親父があらわれた。

バン　バン　バン　バン

一瞬で全員、殺した。

親父「大丈夫か？ケガはないか？」

カイ「オレは大丈夫だ・・・」

親父はカイを睨んだ

親父「お前じゃないそっちの女の子に言ってるんだ!!」

そうすると親父は女の子の方をみた

カイ「なんでだよ!!つつかなんでそんなに撃つのうまいんだよ」

カイは緊張がとれて、親父に強いツツコミをいれた時だった。

バン

カイ「えっ？」

親父はカイのほうに倒れかかった、そうするとカイの顔には一滴の血がついた

カイ「親父？」

カイは何がおこったのかわからなかった。

カイ「なんなんだよこれ？なんなんだよこれ？」

サイトウ「キャハハハハハ」

???「おじさん？いや・い・・・や・・・いやあああー」

女の子は泣いた自分の事ではないのに泣いた

サイトウ「キャハハハハ死ね死ね、よくも裏切ったな、私の計画が水の泡だ・・・お前も『いつぺん死んでみる！』」

サイトウはカイのほうに銃口を向けた・・・

親父「カイ、後は頼んだぞ」

親父は立ち上がって煙幕を投げた、そしてハンドガンで撃ちまくっていた

カイ「親父・・・」

親父「早く行け、バカが」

カイ「親父・・・」

親父「その子を守ってやれ、女の子を泣かすんじゃねえぞ!!」

カイは自分でも気づかなかっただろう、涙がこぼれおちていた事を2度と親父には会えない気がしたからである

カイ「じゃあ、行くぜ・・・」

親父「ああ」

カイは親父に背を向けてホテルの屋上に向かった・・・

そこには、親父が言った通りにヘリコプターがあった。オレ達はそ

れに乗って日本を後にした・・・

続く!!

ちい

カイは日本から逃げ出した。小さな女の子を守るために、親父との約束を守るために

カイ「そついえば名前聞いてなかったな、名前なんていうんだ」

???「私わからない名前もどこに住んでいたのかも」

女の子はどうやら自分がクローンである事や自分が兵器である事や住んでいた場所なども知らなかった、多分しらせなかったのだろう

カイ「じゃあ、オレが決めてやる。」

???「うん」

カイ「お前は今日からちいだ」

ちい「えっ？」

カイ「仕方ねえだろそれしか思いつかなかったんだから、やっぱりだめか？」

ちい「ううん、うれしいよ」

ちいはここに来て初めて笑った

ちい「あなたの名前は？」

カイ「オレはカイだ」

ちい「カイさん？」

カイ「そうだ、これからは一緒に暮らそう、まあ学校の奴等には親父の知り合いの子供という事にしよう」

ちいは顔が真っ赤になって照れていた

ちい「えっ？学校って何なんかな？」

カイ「学校も知らねえのかよ……」

ちい「ごめんなさい」

ちいは泣きそうな顔をしてた、カイは少しいらだったように言った
カイ「ああーもう、わかったから泣きそうな顔しないでくれ」

ちい「ごめんなさい」

カイは諦めて学校の説明をする事にした

カイ「学校つてのはなみんなで遊びに行く所だ!!」

何かを間違ったような説明をカイは、はじめた

ちい「でも、みんな英語、喋るんでしょや、私英語なんて喋れな
いしょや」

ここは日本じゃなくアメリカだからその疑問も当然だった。

カイ「オレの学校は日本人が多くて小さな学校だから大丈夫だ!!
俺も元は日本人だったんだからな」

ちい「本当に？」

カイ「本当だ、それに生徒の人数は10人ぐらいだから学年関係な
しなんだよ、年が離れていても同じクラスってことだ」

ちい「うんわかった、私がんばる」

カイ「おう、頑張れよ」

カイはちいが兵器だと言う事を友達にも本人さえにも教える気はな
かった・・・
知らなくて幸せの事だつてであるとカイは思っていた。理由はそれだ
けではなかった。

ちいが泣く顔はもう2度と見たくなかったからである。

カイ「ほら、さっさと制服を来て学校に行くぞ!」

ちい「うん、わかったあともう少し待ってしよや」

何分が立つとちいは制服を来てあらわれた。

ちい「に、にあうかな?」

ちいは少し照れながらカイに聞くとカイは顔を真っ赤にして答えた

カイ「似合ってるに決まってるだろ!」

ちい「ありがとう」

ちいは笑った

カイ（かわいいー!!って俺は何を考えてるんだ、バカか俺は）

ちい「どうかしたんかい?」

カイ「い、いやなんでも、じゃあ行こうか」

カイとちいは一緒に学校へ登校した、まだ家から少ししか歩いてないのだが、ちいは・

ちい「待つてカイさん」

カイ「お前マジで遅くねえか？」

ちい「はあ、はあごめんなさい。」

カイ「仕方ねえゆつくり行くぞ！！」

この時点でもう100%遅刻だった。学校に着いた時にはもう3限目だった。ちいはもう死にそうな顔をしていた

先生「カイまた遅刻か？ついでに転校生も・・・」

先生は1回溜め息をもらし、転校生である、ちいをみんなに紹介した

先生「と、言う事なのでみんな仲良くしてやってくれ」

ちい「えっと、初めまして、ちいです。」

クラス全員が盛り上がった

クラス全員「わぁぁ」

しかし、ちいの次の1言でみんなが一瞬でさめた。

ちい「えつと、住んでいる場所はカイさんの家です。」

一瞬でカイのほうをみんなが睨んだ

アツ「カイ、ちいさんに何をした」

アミ「ちいちゃんカイの奴に襲われなかった大丈夫？」

リン「ついに年下に手を出しやがったか！」

ちい「えつ？えええええ」

ちいは慌てながら否定して、説明をはじめた

ちいは一瞬で学校の人気物になった。

『昼休み』

アミ「なるほどねえ〜カイのお父さんのねえ〜」

アミは完全に信用していない目でカイを見ていた。

ちい「本当だよ」

アミ「まあ、ちいちゃんが言うんだから本当なんですよ」

カイ（俺の言う事は嘘かい！？）

心の中で虚しくツツコミをした・・・なぜならアミはカイの幼馴染みだからである。

もしもツツコンでいたら俺が逆に殺されそうだったからであった。それだけアミは気が強い

アツ「そついえばまだ自己紹介まだだったな俺はアツだよろしく」

アミ「私はアミよカイの事で困ったらなんでもいいなさい」

リン「ついでにわいはリンやよろしく」

ちい「みなさんよろしくお願いします」

自己紹介も終わりこの日から幸せな日々を過ごすはずだった・・・

学校の帰り道だった。ちいがいきなり積極的に話はじめてた

ちい「ねえ、カイさん私この町の事あんまり知らないから教えてくれんかな？」

カイは少し驚いた顔した

ちい「やっぱりだめかな？」

カイ「別にいいぜ！とっておきの場所に連れてってやる」

そう言うときカイは町はずれにある田んぼだけしかない田舎町に行った

ちい「結構、暗くなってきたね？」

カイ「ああ、そうだなでも暗くないとダメだからな」

ちいはふとアミの言葉を思い出した

アミ「いい、男はねたまに欲がたまりすぎて暗い所に連れてっていい

きなり襲われるかもしれないから夜はあんまり出歩かないほうがいいわよ」

ちい「うん、わかった気をつける」

アミの言葉を今頃になって思いだしちいは不安になって来た・・・

カイ「そろそろだな」

ちい（そろそろ、なんなんかな？）

ちよつとちいは不安になっていた

カイ「ちいちよつと見てみな？」

ちい「うん」

ちいはその光景をみた瞬間ちいの不安はどこかへ消えていた

ちい「わぁー綺麗、カイさんこれなんなんかな？」

カイ「これはなホタルっていう虫だ、夜じゃないとホタルは光らないからさあ」

ちいはものすごく喜んでいて笑っていた、それを見ていたカイも一緒に笑っていた。

ちい「あっ!？」

カイ「どうした？」

ちい「カイさんが笑った所、初めてみた」

カイはちよつと顔が赤くなった

カイ「さあな、そうだったかな」

少しいばりながらカイは答えた

ちい「あはははっ」

カイ「あはははっ」

ちいとカイはまた一緒に笑った。

カイ（こんなに笑ったのって何年ぶりかな）

家の近くまで来た時だった。誰かが後ろにいたのをカイは気づいた

カイ「誰だお前は!」

怖い顔の男「カワイイ子連れてるやん兄ちゃん」

男は銃をちらつかせながらいった

カイ「なんのようだクソが」

カイが懐にある銃をとろうとした時

バン

カイ「ぐあああああ」

ちい「カイさん」

カイは足を撃たれて倒れた、そこにちいが駆け寄ろうとした瞬間だった。

怖い顔の男「おっとまった、あんたも撃たれなくなったらこっちにきな」

ちいは泣きながら答えた

ちい「いやです」

怖い顔の男「このクソアマが!!」

銃口が完全にちいの方に向けた・・・

バン

その瞬間だった。カイはちいをかばった

ちい「カイさん」

カイ（いつたい何やってんだ俺は？クソが結局オレはちいを守れなか・っ・た。す・まねえ・親父・ごめん・ちい）

カイの意識がもうろうとしていた時だった。

ちい「カイさん・・・・」

怖い顔の男「さあさあ早くオレの所に・・・」

男が最後まで言葉を言えなかったなぜならこの世で見た事もない光景を見てしまったからである。

カイ「ち・い・？」

カイも見た光景それはまるで天使が降りたかのような感じだった。

ちいは背中から羽がはえて腕はグレネードランチャーに変わった

怖い顔の男「ひiiiiiii」

男は怯えていた、何がなんだかわからなくなっていた

ちい「目標・・・1・2344」

ちいが訳のわからない言葉をしゃべり始めた。ちいは意識がなかった
ドッゴーーーン

男は死ななかった。ちいが目標をずらしたようだった。壁に大きな穴
があいた。

怖い顔の男「ギャアアー怖いよ、かあちゃん」

ちい「あれっ？」

ちいは意識が戻ったようだった

ちい「私なんで？なんなんかな？この体？」

カイは立ち上がりちいの方に向かってちいを抱いた。気づくと血も
止まっていた・・・

ちい「どうしたの？なんでカイさん泣いてるのかな？」

カイ「うつつ」

カイは涙をふいてちいに全てを話すことにした
どれだけ絶望しても俺はちいを守る、たとえどんな未来がまっ
ても俺はちいを守るだろう。

続く！

約束

俺はちいに全てを話すことにした……………

カイ「ちい……実はな、お前は……」

カイが真剣な目で何かを言おうとした時にちいは……………

ちい「カイさんすごい私、はね生えてるよ、もしかしてみんな生えてるのかな？」

カイはひるんだ

カイ（鈍い……果てしなく鈍い……）

ちいは羽がある事を全く気にせず、1人ではしゃいでいた

ちい「カイさんすごいなんか飛べるよこの羽!？」

ちいは上空に飛んだ、カイは辺りに誰もいない事を気にして、誰もいないと判断した時

カイ「ちいそろそろ帰るぞ」

ちい「うん、わかったでもカイさん病院にいかないと・・・」

カイの傷はいつの間にか血が止まっていた

カイ「いいんだよ、こんなのかすり傷だよ」

ちい「本当に大丈夫・・・私のせいで・・・その傷・・・」

カイはちいの頭に手を乗せて溜め息をした

カイ「だーから、ちい泣くな、泣くとなんかムカツクだろう。」

ちい「でも・・・」

ちいは完全に判泣き状態であつた

カイ「お前のせいじゃない、俺は俺の意志でちいを守りたいと思う
たから、ちいを守ったんだ。」

ちい「カイさん？」

カイ「さあ帰るぞ！」

ちい「うん」

結局カイはちいの体の事を告げる事は出来なかった。

次の日の朝

ちい「ふわー」

ちいは朝めざめて大きなあくびをベッドの上でしていた

ちい「なんか昨日はいろいろあったな」

ちいは思いだし笑いをした。

ちい「そうだ、カイさんは・・・」

ちいはベッドから降りて、1階で寝ているカイを見にいった。

カイ「すうー」

カイはまだ眠っていたちいはそのカイの顔をみて少し笑った。

ちい「さあーで、この家に住ませてもらってるんだから、せめて朝ご飯を作ろう・・・」

ちいは一瞬めまいがして、倒れそうになった

ちい「あれ？ちょっと疲れたんかな？でもがんばろう！」

ちいは台所に立って朝ご飯を作りはじめた。カイはそんな事に気がつかず、夢の中だった

ドッカーン

ちい「アハハハ」

そこにはちいが立っていた。サイトウのような笑い方をしていた。

ちい「カイさん私の体どうなってるんかな？」

カイ「ちい・・・」

ちい「みんな死んじゃえ・・・」

その瞬間、地球は灼熱に覆われた。生きている全てのものが一瞬で燃えて灰になった。

カイ「ちいー！！」

カイは汗をびっしょりかいて目が覚めた。それを聞いたちいも驚いてカイの方を見た

ちい「どうしたんかな？大丈夫？」

カイ「ああ・・・夢か・・・」

ちい「夢？」

ちいが首をひねって不思議そうに聞くと

カイ「いやなんでもない」

ちい「？」

ちいは少し疑問におもったがあまり気にはしなかった・・・

ちい「はい、どうぞ朝ご飯」

それはたまご焼きに「ご飯とみそ汁というどこにでもありそうな朝ご飯だった。

カイ「ちい・・・これお前が作ったのか？」

ちいは顔を少し赤くしながら答えた

ちい「あまり自信ないんだ」

カイ「まあとりあえずいただきます。」

たまご焼きを一口食べるとカイは

カイ「しょっぱーい」

ちい「えっ？えっ？」

ちいはおどおどしながらたまご焼きを食べてみると、それはものすごくしょっぱかった

ちい「うえ〜」

カイ「まさか、ちい砂糖と塩を間違えたんじゃないか？」

ちい「そうみたい・・・ごめんなさい。」

ちいは泣きそうな顔をした・・・

カイ「仕方ねえな」

カイは次にみそ汁を飲もうとおそるおそる飲んだ

カイ「おっ！？このみそ汁なかなかうまいぞ！！」

想像していた味とは全く違う味がしてカイは驚いていた

ちい「本当に？」

カイ「ああ、なかなかいけるじゃねえか」

ちい「良かった・・・」

ちいは少し笑った、ちいのその顔をみながらカイも笑った。

カイ「ごちそうさま」

ちい「カイさんたまご焼き全部たべてくれたんかい？ありがとう」

カイ「まあ、ちいがわざわざオレのためにご飯を作ってくれたんだから全部たべないとな」

カイとちいは朝ご飯を食べ終わったら制服に着替えて学校に行く事にした。

ちい「はあ、はあ」

やっぱりちいはものすごく遅かった、結局学校にも遅れて廊下に立つ事になってしまった

ちい「カイさんごめんなさい。私がなまら遅いせいで・・・」

廊下でちいが謝った。

カイ「なまら？」

ちい「あつごめんなさい。なまらっていうのは本当について言う事じゃ」

カイ「そうか・・・前から気になっていたがどこの方言だ？」

ちい「さあ？私にもわかんない、なんかこの方言を使うと懐かしい感じがするんだ」

カイ「そうか・・・」

授業も終わり昼休みになるとやっと先生が中にいれてくれた

アミ「ちい大変だったね。どっかのバカのせいでこんな事になって」

ちい「アミさん違うんです私のせいべさ」

アツ「そんな事ないってこいつが全部悪い」

カイもさすがにアツの言う事にはキレた

カイ「てめえー殺すぞ！！」

アツ「ああ、やってみなよ」

アミ「コラッ、喧嘩するなら外でやんな」

アミに言われた通りにカイとアツは外にしようとした

ちい「やめてくれんかな？私の事で争わないでほしいしょや」

ちいの説得も虚しくカイとアツは外にでた。ちいとアミもいそいでその後を追った。

カイ「てめえーだけはぜってえ許さねえ」

二人とも姿勢をひくくした・・・銃はなしの拳だけで決着をつけるようだった。

カイ「オラッ!!」

カイは掛け声とともに体当たりした。それをちいは泣きそうな顔でみていた。

ちい「やめて、やめて」

ちいの体がまた光ったカイはそれにきずいてすぐに喧嘩をやめた。

カイ「オレが悪かった」

アツ「えっ？」

カイはいさぎよく謝った。それを聞いたアツやアミは驚いた、なぜ

ならいつも喧嘩ばかりするやつがいきなり自分から謝ったのだから

カイ「ちい、ごめんな」

カイはちいの頭をなでて教室に戻った。

アミ「嘘？あいつ何か変なものでもたべたのか？」

ちいがそれを聞いてビツクと反応した。

ちい（まさか、カイさん今朝のたまご焼きのせい？とにかく喧嘩が止まって良かった）

ちいはその事を考えるといってもたつてもいれなくなった。ちいはいそいでカイの後を追った。

ちい「カイさん大丈夫やっぱり今朝のたまご焼きが・・・」

カイ「別に・・・関係ねーよ」

カイとちいは黙りこんでしまった。ぎこちない空気がただよっていた

それからしばらくして授業は始まって、普通通りの日になるはずだった・・・

学校が終わりアミとちい、カイと変わったメンバーで帰っていた時であった。

アミ「カイ、あんたちいちゃんに何をしたのやっぱり欲に勝てず襲ってしまったの？」

カイ「アホかおめえは誰がちいを襲うかよ」

ちい（カイさん？）

カイは妙にムキになっていた

アミ「そのムキになる所がまた怪しい」

カイ「うるせえー黙れアホが！！」

相変わらずカイは口が悪かった、機嫌もすごく悪く周りにいるちいやアミまでその異変に気がついた

ちい「カイさん・・・やっぱり私なんか悪い事したのかな？」

またまたちいとカイは黙りこんでしまった。それを見ていたアミは大きな溜め息をした

ようやく家に着いた頃だった。ちいが少しふらついた

カイ「大丈夫か？」

ちい「あ、ありがとうカイさん」

カイ「少し休みな今日はいろいろあったからしょうがない」

ちい「うん・・・」

ちいは先に2階にのぼり寝室へいった。カイもしばらく考え事をし
て寝ようとした時だった。

ピンポーン

ベルが鳴って戸を開けるとそこには親父が日本から逃げる時に呼ん
でくれた飛行機のパイロットだった。

その後ろには自衛隊のような格好をした人が数人いた。

パイロット「お久し振りです」

カイ「あんたか・・・」

パイロット「突然ではありますが、日本にいたクローンを私達、科
学者がひきとる事が決まりました」

カイは驚いた、

カイ「どういう事だ!!」

自衛隊のような格好をした人達はライフルを構えて話をした。

自衛隊? 「拒否権はない、なぜなら大統領命令だ!!」

カイ「ちいはどうなるんだ?」

パイロット「我々が殺す」

カイ「なっ……」

パイロット「彼女は危険すぎるへたをするとわが国いや全世界が破滅するかもしれないんだぞ!!」

カイ「だからって殺す事はないだろ!？」

パイロットは苦笑いしながら話はじめた

パイロット「たかが小娘1人だろうがアメリカの未来がかかってるんだ」

カイはこの言葉を1度どこかで聞いた事があった

???「アメリカの未来のためにも」

カイの記憶から蘇ったのはまぎれもなく親父がいった言葉だった。

カイ（まさか……親父、このために……はじめっから殺す気だったのか?）

自衛隊？「早くしろクローンはどこだ！」

自衛隊のような格好をした人達は一斉にカイの家に入り辺りを探しはじめた

カイ「やめやがれ！！クソが！」

カイは胸元に手をいれようとした時、後ろでハンドガンを構えているパイロットがいた

パイロット「妙な真似したら殺すぞ！！」

カイ「クソッ」

自衛隊？「発見しました！！」

1人の声がした

ちい「誰なんかな？あんだ達」

パイロット「よしっひきあげるぞ」

ちい「カイさん助けて助けて」

カイ（やめろ・・・やめろ・・・やめろ）

カイは心の中で叫び続けたがどうにもならなかった。
その結果ちいは研究所に連れていかれた、カイは心に穴があいたようにカイは何もしなかった

アミ「カイ!!」

いきなり家に現れたのはアミだった。

アミ「なんなのよさっきのは？」

アミの質問に答える事がカイには出来なかった。

アミ「クローンとかアメリカの未来とかもう訳がわからない」

アミは泣きはじめた、しかしカイは反応しようとしなかった

アミ「カイ!ちいちゃんがクローンってどういう意味なのよ!」

カイ「・・・」

それをみたアミは飽きた顔だった。

アミ「いいわ私達でちいちゃんを助けるからアツとリンも一緒に行くんだからね」

そっさいながらアミはカイの家をさった・・・

カイ(どうしてだろうどうしてこんな事に・・・)

カイはちいとあってここまでの1週間を思いだしていた・・・

ちい「カイさん大丈夫?怪我してない?」

カイ「アホ俺が守ってやるっていったろ」

ちいは笑いながらうなずいた

ちい「うん」

カイはそんな事を思いだしていた。思いだすと無償に腹が立った

カイ「俺は親父にいわれたからちいを守ってるんじゃないやねえ俺自信が守りたいと思ったから守っているんだろうが約束したんだちいと必ず守る」

カイはちいを助ける事を決めていた時にはもう日がおちていた

カイ、アミ、アツ、リンと全員でちいを守ると決まった。その後にどんな事があっても

続く!!

血

アメリカは日がおちて真夜中になっていた

アメリカ最大の高さがあるビルのどこかにちいはいっている事がわかった

カイ「てめえーら行くぞ!!」

アツ「結局カイもついてくるんだよね」

アツは少し溜め息をおとしながら話した。このビルは約50階という無駄にでかかった。
みんな拳銃を持っていた。

カイ「まずは下からだバレないように行くぞ!!」

アミ「まあバalezには無理だと思うけどね」

カイ「それでもちいを助ける!!」

アツ「いつから熱血純愛キャラになったんだ？」

アツの言う事を完全に無視した……

カイ「1階……」

ビツーーーー!!

アツ「速攻かよ」

カイ「仕方ねえだろうがいきなり警報器がなりはじめたんだろうが
!!」

『????』

薄暗い中1人の男が苦笑いをしながら、モニターを見ていたそのモニターに写っているのはカイ達だった。

どうやらこの男が警報器をならしたようだった。

????「ここまでこれるなら来てみなよ」

男はまた笑った

『カイ達』

カイ達は1階から2階と順序よく登って調べるはずだったがそれはとても困難になった

カイ「クソッどうすりゃいいんだよ!!」

????『カイ』

カイ「えっ!？」

今かすかにカイの耳に聞こえた声

???『助けてよカイ』

カイ「ちい!？ちいなのか？」

ちい「私はここよ」

カイにはかすかながらちいの声が聞こえた。その声はとてもよわよわしかった。声が聞こえるその場所に向かった。

アツ（まずいな・・・）

後ろからは3人の兵士がカイ達を追っていた

カイ「追いつかれるぞいそげ!!」

兵士達は銃を持っていた。

5階の階段を登ろうとしたら前からまた兵士がきた

アツ「やばい囲まれたぞ!!」

バン、バン、バン

生暖かい赤いものが宙にまった、カイの顔にその赤いものがついた

カイ「えっ!？」

兵士A「死ね!!」

始めに撃たれて赤い血を出したのはアツだった。

カイ「てめーら!!」

カイは涙を流しながら銃を上段にいる兵士に向けた・・・

バン、バン

まただまた俺はみんなに……………

アミ「バーカ……あんたが……死んだら誰をちいを……………
助けるのよ……」

目の前にアミが現れカイを銃の弾から守ったカイの体にもたれかかるようにアミは倒れた

カイ「なんで?なんでなんだ?」

2人とも、意識はなかった・・・カイの体は2人の血で赤く染まっていた、アミは最後に一言言って意識をなくした

アミ「ちに・・・あんたの・・・気持ち・・・伝えなさいよ」

カイは今、自分自信で後悔した、どうしてこんな事になったのか。俺は何しにきたのか？

兵士A「最後の1人だ」

銃を一齐にカイの方に向けた・・・

カイ（俺、死ぬのか・・・ちにごめん・・・みんなごめん）

カイはそんな事を考えながら意識を失いかけていた

???「撃つのやめー!!」

誰だろう?どこかで聞いた声だ?わからない俺は・・・・・・どうなる・・・ちに？

ちい？

暗闇の中、俺はちいの名前を呼び続けた

続く！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587a/>

涙

2010年10月9日20時24分発行